

業務展望レポート			
1	岡 利旨久	所属名	香川県立五色台少年自然センター
		職名	主任

[1]研修参加の意義

ネパールでの生活・教育現場等を体験することで、必然的に、様々な点において、ステレオタイプの日本と比較することとなるが、それが業務の問題や問題解決のための手法を考えるきっかけとなった。

この研修に、教育行政担当者が参加したことに意味があると思う。それは、現場での指導という点に留まらず、予算・人事・連携・研修その他様々な方策として具体化できることにある。

ここで活動している日本人の言葉(記録として文字に残らない思い)を直接聞き、書籍等で培った知識とあわせ、複合的にネパールの現況、国際協力の抱えるジレンマを捉えることができた。彼らの思いに加え、自分が体験し感じたことを1つでも、形にしていきたいと思う。

[2]海外研修全般に関する所感


研修中、乳児死亡率を0%にしたことで有名な沢内村村長深澤晟雄のことを思い出していた。村長となってからの彼の決意と覚悟、その手法で、その偉業をなしたげたその遺伝子をネパールで活躍する日本人からも感じたからかもしれない。彼らが現地に受け入れられ活動していることも、これまで、アジア各国で人知れず、その国のために貢献してきた日本人がいたことを証明している。多くの人はその功績が称えられることもないが、そんな日本人がいることを強く誇りに思うとともに、自分自身の原点、日本人とは何か強く意識させられた。また、彼らのネットワークには驚きを感じた。その繋がりこそが、ここで原動力であると改めて感じるとともに、自分もその一員になれたのではないかと自負している。


格差社会、多様化社会、出稼ぎ国というネパールの現状をみるにつれ、問題解決の困難さを感じるが、ここには自国の誇りとして1つにまとまるべき要素がある。ヒンドゥー教徒であっても、ゴータマ=シッダールタを生んだ国として、誇りにしているし、サッカーの国際試合の勝利をみても同様である。そういう意味では、解決の糸口はなくはないと思う。アーノルド・トインビーの言葉を逆説的にみると、あとは、信念のある国の指導者がどうこの国を導くかによるのではないかと感じた。

非常にみるべき点の多い国であるが、今後のこの国の動向は、格差社会、多様化社会と言われている日本においても何が必要なのかヒントになるのではないかと、目が離すことができない。

改めて多くの人に支えられて参加することができた研修であった。また、JICAなくして、現地の社会に入りこんだ研修を受けることができなかつたと思う。この研修のため、ご尽力いただいた皆様に感謝したい。

[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
ラブグリーンジャパン 	<p>革命の影響で施設を爆破されても活動を続ける代表の言葉の重みを感じる。</p> <p>「ネパール人の国をよくするのはネパール人でなくてはいけない。」</p> <p>支援国から、何でも与えられれば、与えられた側は何もしなくなる。それが続けば、思考の停滞となり、支援国に隷属することにつながる。与えられることを当然と思う途上国での活動においては、一工夫必要である。</p> <p>地元の住民自ら長く続けられるように、現実的な手法を用いて支援を行っている。それに面白いと感じたが、同様なことを行政がを行うことの難しさを改めてつきつけられた。また、知の停滞は国を滅ぼすことにつながりかねない。改めて公教育の重要性を感じた。</p> <p>「教育を受けると農業から、国から離れていく。」</p> <p>コンピュータの勉強をしても、国内に受け入れ先がなく、より稼ぎのよい海外に人材が流出する。この国の出稼ぎ労働を防ぐためには、国内に産業を根付かせる必要がある。学校をつくるだけに留まらず、働く場所も考えた支援に乗り出している。生きることは働くことであるとも言われている。その先を考えた支援を行わなければならない。非常に重い言葉として受け止めさせられた。</p>

	<p>教育だけでは国に人は定着もせず、国民所得は増えることはない。教育、産業、行政、地域社会との連携していくことが重要であると感じた。</p> <p>途上国の多くは何らかの支配や圧力を受けた経緯がある。そうした中で、支援を広げ、現地の人に受け入れもらい、その活動を継続していることに頭が下がる思いであった。</p>
<p>バクタプル郡のCBR(地域に根ざしたリハビリテーション施設)</p> 	<p>ここを訪れたとき、日本の知的障害者福祉のさきがけとなった石井筆子のお話を思い出していた。彼女は、富国強兵の時代、障害者教育の理解を得ることが困難であるなか、自ら行動し、知己に働きかけ、知的障害教育の発展に努めたことで有名である。</p> <p>ここバクタプルのCBRは、教育施設でなく、自立支援施設としての位置付けである。支援施設の統一的基準はなく、現地にあわせて、他の既存施設を利用するような状況である。</p> <p>確かに、障害者が自立するためにも、社会、産業界等との連携し、彼らが自立できるシステムをつくりあげることも重要であるが、それ以上に、彼らに教育の場を提供する必要があると感じた。</p> <p>CBRは、まだまだ教育施設とはいえないが、ここを拠点に、特別支援教育の活動の場が広がっていけるような場所になることを期待して止まない。</p> <p>自立支援施設をつくりそれを維持していくことは日本でも難しいが、命を支えるのは地域力であることを改めて思い知らされた。</p>
<p>パトレケット村(ホームステイ)</p> 	<p>ネパール人と一緒に生活することで、ここでの家族のありかた、彼らが大切にしているものを知ることができたと思う。</p> <p>言葉も通じない人を快く迎えていただいただけでなく、その1つ1つに暖かい気持ちが伝わってきた。</p> <p>ここでの暮らしは、私には非日常であるが、とても心地がよく、ゆっくりとした時間の中で、心身ともリフレッシュすることができた。</p> <p>自分の仕事の説明をしたときに、「子どもたちに幸せを与える仕事をしている」と言われたことは、一生忘れることはないと思う。</p>

[4]今後の業務における活用の可能性

ネパールで生活の中で文化習慣の違いによるとまどいを感じたが、これらを現在の職場で生かすことができないか考えるよい機会となった。現在企画・計画中のキャンプ等に五色台少年自然センターでの新しいイベントに、ネパールでの経験を盛り込んでいきたいと考えている。また、従来の職場の枠・価値観による交流にとどまらず、新しい団体等への働きかけをし、高校、留学生等様々な人と交流を持ち、当センターを核としたイベントにつなげていきたい。

この研修を通じ、複数の視点で物事をみることの重要性を再認識させられた。これからの自分自身の仕事も、複数の視点で捉えることができればと思う。